

東西文化交流史におけるF．ザビエル

——人類史の大転換期にあって，改めて宗教の意義を問う——

沖 浦 和 光

目 次

- 1 大航海時代の幕開け
- 2 東洋へ教線を伸ばしたキリスト教
- 3 わが人生の思想的転機
- 4 この歴史ドラマを構成するキー・ストーン
- 5 日本に渡来した新宗教
- 6 少数民族バスク人だったザビエルとロヨラ
- 7 「イエズス会」の際立った結成理念
- 8 戦国時代末期の日本の社会状況
- 9 世界史でも稀な宗教弾圧

1 大航海時代の幕開け

この物語の幕が開くのは，世界史のかつてない激動期だった《大航海時代》である。その舞台は，西洋の西端に位置するイベリア半島から始まり，インドの南西海岸を経て，香料列島として知られていた南太平洋のマルク諸島に至る。地理的に見ると，実に東西数万キロにまたがって繰り広げられた波瀾万丈の大歴史ドラマである。

15世紀末の大航海時代から話が始まる。東方世界の「未知の国」を発見す

るために大探検に乗り出していった航海者たち——彼らが切り開いた東西交流史が、この物語の土台になっている。ポルトガルリスボンからアフリカの喜望峰を回ってインドへ、さらには南太平洋海域から東アジアまで舞台は広がっていく。もちろん、同時代の日本の中世から近世・近代にまで話は及ぶ。

その東西を結ぶ文化交流の重要な結節点となったのが、インドの「ゴア」、マレー半島の「マラッカ」、そして香料の特産地であったインドネシア・マルク諸島の「アンボン」であった。この三大「植民都市」を基地として、その三つの点を飛石づたいに西から東へ結ぶ航路が、ポルトガルが大航海時代の全盛期に開拓した「東洋への道」であった。

シルクロードと中国大陆を中心に、東洋の一部はすでにマルコ・ポーロ(1254～1324)の『東方見聞録』で紹介されていた。しかし、太平洋の諸島や日本列島を含めて、インド・中国からさらに先にある東方世界は、西洋人にとっては全く未知の土地であった。

大航海時代が始まるまでは、アメリカ大陸はまだ西洋人には知られておらず、世界の海洋の半分を占める太平洋の海域は、その広大な存在すら感知されていなかった。マゼランが携行したと伝えられる1492年に製作されたM・ベハイムの世界図では、アメリカ大陸は影も形もなかった。空想で描かれたその地図の東方世界は、実際の姿とは全く異なった奇怪な形状で描かれていたのである。

新航路開拓に成功した船長たちがもたらした情報をもとにして、続々と新しい地図と海図が製作されるようになったが、1660年に描かれたクルンケの世界図に見られるように、今日の地図にかなり近い世界概略図が出来上がったのは16世紀の中頃だった。すなわち、大航海時代が始まって数十年が経過して、ようやく東方世界を含めた新しい世界像が成立したのであった。地誌学的に言えば、そのような世界認識の概念図がほぼ出来上がった時点から、狭義の＜近代＞が始まったと言えるだろう。

その当時は、地理学や海洋学は言うまでもなく、天文学・気象学・航海術

についての知識も不十分だった。正確な地図も海図もなく、十分に頼れる観測器械も持たない天文航法で、100トン程度の小さな帆船に乗って前人未踏の荒海を乗り越えて行くのだ。もちろん、食糧や水の補給も思うにまかせなかった。疫病も発生した。そのような航海は、まさに命がけの大冒険であり、勇猛果敢かつ沈着冷静な船長でなければ成功はおぼつかなかった。

初めての世界一周で知られているのは、スペインが派遣したマゼラン船隊である。5隻の船団は、1520年8月にスペインのセビリアを出発した。2カ月後にアメリカ大陸南端の海峡を発見した。海峡の通過に1カ月かかったが、ついに未知の太平洋海域に入ることができた。それからさらに1年間の苦難の航海の末、やっとマルク諸島に辿り着いた。帰路はインド洋を經由してアフリカ南端を回り、1522年9月にセビリアに帰り着いた。

全員で237人を乗せた5隻のマゼラン船団で、無事帰国できたのは85トンの帆船ビクトリア号だけだった。そのビクトリア号の乗組員は18人に減っていた。出発時には、単純に推定しても50人をこえる船員が乗っていたに違いない。

海図なしに未知の荒海を突っ走るのだから、難破と破損が相次いだ。太平洋に入ってから3カ月間は、黄色に変色した腐った水を飲み、帆桁に張りつけてあった牛の皮を海水に数日漬けて柔らかくしてから火にあぶって食べた。最高の食物は船内のネズミだった。

明日の行方だけではなく、明日の生命も分からぬ不安感と危機感、そして食糧不足と昼夜の区別もない苛酷な労働から、当然ストレスもたまった。船員の不満・反抗は絶えなかった。指揮者のマゼランにしても、フィリピンのセブ島沖にあるマクタン島での先住民との戦闘ですでに戦死していて、再び帰ることはなかったのである。

このように、再び故国の土を踏めなかった数多くの犠牲者を出しながらも、ポルトガルとスペインは、未知の東方世界へ相次いで船団を派遣した。そのことについてはあとで詳しく述べることになるが、第1章では、まずポルトガルが開拓したアフリカ回りのインド経由の東方への新航路がおもな舞台と

なる。

アフリカ南端の喜望峰を回って、インド西岸への航海に最初に成功したのは、1498年のヴァスコ・ダ・ガマの船団であった。それ以後、ポルトガルの最初のインド総督となったアルブケルクの指揮下にある強力な武装船団が、インドの南西海岸からマレー半島、ついでインドネシアの諸島への進出に成功した。さらに中国大陸江南地方の沿岸から「黄金の国・ジパング (Gipangu)」へと、次々に新航路を開拓していったのであった。

2 東洋へ教線を伸ばしたキリスト教

このように15世紀末から17世紀初頭にかけて、相次いで西洋人がやってきた東方世界を舞台にこのドラマは進行する。もちろん、その地の自然をはじめとして、西洋人が初めて実見することができた東方世界の諸民族の文化や民俗の地誌的考察も含まれる。しかし、それらはこの物語を組立てていく上での舞台設定にすぎない。

そのような大きなステージの上で展開されるこの物語は、一口で言えば次のようにまとめられる。すなわち、人類史の大きい転機となった疾風怒濤の大激動期を生きて、たまたま一つの「宗教結社」に結集した群像が織り成した壮大な人間ドラマである。断っておくが、この場合のドラマは、想像力で組み立てられた架空の物語をさしているのではない。ドラマには、「劇的な事件」「劇的な状況」の意味がある。ここでは、稀に見る「波瀾に富んだ歴史ドキュメント」という意味でドラマという言葉を用いた。

さて、このドラマは、ひとりの人物を中心に、その周りに広がった＜精神の磁場＞に結集した人びと―その実像をひとりひとり見ていくところから始まる。そしてそれらの群像の波瀾万丈の生涯の軌跡を追うことによって、人類の歴史の大転換期に繰り広げられた人間の＜生き方＞＜死に方＞、すなわち、その当時の死生観の意味するものを今日的視点から改めて問い直すことになる。

この物語の序幕は、すでに述べたようにインドと東南アジアを中心に熱帯地方で繰り広げられる。やがてその新しい宗教運動は、東アジアまで教線を伸ばし、ついに1549年夏に日本に上陸する。この物語の序幕の主役が、フランシスコ・ザビエル（1506～1552）であることは改めて言うまでもないだろう。このあたりの話は学校のテキストにも出てくるし、たまにはTVのドキュメンタリー番組にも登場するので、この歴史物語の表層の部分はよく知られている。

だが、その深部で繰り広げられた人間ドラマの実相は、時代の経過とともにしだいに歴史の闇の中に消えていって、今ではほとんど見えなくなっている。ザビエルは何のために、何を求めて、未知の東方世界に、そしてこの日本にやってくる決意をしたのか。

万里の波濤を越えて日本にやってきたその一行は、インドのゴアから出発した8名であった。マラッカから中国人海賊が操船するジャンクに乗り、76日間の苦難の航海の末、やっと鹿児島に辿り着いたのである。どういうきっかけで、その「訪日クルー」が編成されたのか。その運命的な出会いの過程を第1章でみることになる。

20世紀末の今日、既成の世界秩序が音を立てて瓦解しつつある。しかも来たるべき新時代のヴィジョンが不透明で、依るべき価値意識も混迷をきわめている。そのようなカオス状況の中で、人間は「何のために、何を目ざして生きるのか」という根本問題が、さまざまの視座から問われている。そのことはまた、人間の＜生＞と＜死＞の意味づけに深く関わってきた宗教そのものの原義を問い直すことになる。

近代の入口にあたる16世紀に、この書物で取り上げる一つの新しい教団が結成された。それを結成したのは、僅か7名の青年同志たちだった。ローマ・カトリック教会内の新グループとして結成されたのだが、旧来の教会の枠組を突き破る多くの革新性をもって登場してきたのである。もちろん、時代そのものの大きい制約と旧来からの教会の規制を免れることはできなかったにしても、キリスト教会史上において注目すべき新しい要素を潜めていたので

ある。

一口で言えば「闘う革新派」として旗揚げしたのだが、その中心になったのはパリ大学の同窓生だったイグナティウス・デ・ロヨラとザビエルだった。そして、この2人は、イベリア半島のバスク地方の生まれだった。

バスク人は、インド・ヨーロッパ語族とは異なる固有の言葉を話し、独自の民俗と文化を持つ先住民族であった。彼らは、周りの諸民族から異人視されていた。そして、未開民族の住む土地として賤視されてきたバスク地方は、しばしば周りの諸民族に攻め込まれ、その度に屈辱の憂き目を見てきたのであった。

そのような歴史的背景もあって、このバスク人を中心とした新グループは、国家の壁を突き破り、民族や文化の差異を乗り越える新しい人間の生き方を求めて結集することになったのであった。レイネル・ライネスのようなユダヤ系キリスト教徒もその発起人に加わっていたのである。

そういう事情も作用したのだろうか、彼らのグループはすんなりとローマ教皇の認可を得ることができなかった。つまり、最初の間は「異端」視されていたのである。初代会長になったロヨラ自身も、何回も宗教裁判にかけられて投獄されたのであった。

本論で詳しく述べるが、彼らが新集団に結集した思想的契機が、第二に究明すべき問題となる。そして、建築・彫刻・音楽・演劇など17世紀に開花したバロック芸術は、斬新な趣向をこらした彼らイエズス会の伝道の方式が一つの母胎となったのであった。

そういう問題も含めて、われわれ人間にとって、宗教運動とはそもそも何を目ざす運動であったのかという根本のところを、もう一度見直すことになるだろう。

本書の主題に引きつけてもう少し具体的に言えば、20世紀末という現代の視座から、クリシタンの東洋渡来の文化史的な意味や思想史的な意義を改めて問い返していくことになる。そして、今では見えなくなってしまった歴史の深層を掘り返しながら、この物語は進行していく。

3 わが人生の思想的転機

序文を終わるにあたって、私事で恐縮だが一言付言しておく。私の青年時代は、戦時中の少年時代に身に蒙った天皇制ナショナリズムの反作用もあって、「戦後世代」の通例として＜脱亜入欧＞思想にすっかりとらわれていた。そこで、1947年に大学に入ってから、ヨーロッパの文化史と社会思想史を専攻するようになった。したがって40歳代までに書いた論文は、その三分の二が西洋の歴史と文化に関するものであった。

1970年代初頭にイギリスに留学して、初めて西欧市民社会の実相に接した。その帰途インドに立ち寄り、さらにその翌年アフリカを訪れた。そこで一つの大きい「回心」を経験したのであった。それをきっかけに東南アジア諸国を毎年のように訪れるようになった。

その「回心」とは、一体どのようなものであったのか。それについては、『わが人生の転機』と題した小稿を草したことがある（『朝日新聞』1986年3月11日号）。インドとアフリカという非西洋社会の一端に触れたことによって、私のそれまで抱いていた＜脱亜入欧＞を根幹とした思想体系が大きく揺れ動き始めたのであった。

すなわち、一口で言えば、それまで抱いていた西洋中心の一元的な歴史進歩史観が瓦解し始めたのである。つまり、諸民族の歴史の多系性と、その文化の多様性について、改めて考え直さねばならないことに気付いたのであった。

そういう問題意識を改めて反芻しながら、これまでの自分の思想的歩みを再検証するために、1980年代からインドへ6回、東南アジアへは30回あまり訪れた。そこに住む諸民族の歴史・宗教・文化・民俗を自分なりに学びながら、「物の考え方」や「人間の生き方」について、改めて考え直さねばならないと思い至ったのである。

そして、私の胎内に長い間巣食っていた《未開から文明へ》という単線的な歴史進歩史観がしだいに解体されていった。毎年のようにアジアの辺境と

されていた土地を歩き、新鮮な発見の旅が続いた。大自然の中で生活しながら小さな共同体で生きる人びと——そのほとんどが先住民族であった——、彼らの生活は古い時代の人間の生活を偲ばせるが、同時にまた人間の新しい生き方を示唆する何かがあると感じた。

その頃にもう一つの大きい出会いがあった。今では日本近代思想史にその名が出てくることはまずないが、高橋貞樹という青年が19歳で書いた『特殊部落一千年史』である。1924年に発売された直後に発禁となって、幻の名著と伝えられていた^{きこう}稀覯本である。その本を復刻版で読んで、私は大きい衝撃を受けた。(現在は岩波文庫版で読める。『被差別部落一千年史』)

アジアの各地からこの列島にやってきた日本民族の諸源流から説き起こし、古代天皇制国家における身分制の形成史を第一章に据えている。日本史を通底する<聖>と<賤>との対抗関係を鋭くえぐりながら、日本文化の深層に流れている賤民文化という地下伏流に説き及んでいる。それから私は高橋に関する全資料を集め、まだ存命されている旧友人諸氏を探し出して、彼の青春の時代について尋ね歩いた。きわめて不十分なものだったが、高橋の思想的軌跡を中心にかなり長い評伝を書いた。(『日本マルクス主義の一つの里程標』「思想」1976年12月号から4回連載)

高橋は水平社結成直後から部落解放運動と深くかかわった。そして、モスクワに2年あまり留学した。当時の世界の革命運動ともさまざまな接点をもっていたコミンテルンへも出入りした。

彼はその貴重な体験と知見を生かしながら、日本の<部落差別>にとどまらず、<人種差別>、インドの<カースト制差別>、<ユダヤ人差別>、<先住民族差別>などについて広い視座から論じている。世界史に現存するさまざまな差別について紹介し、それらの問題の歴史的起源を全体的に論じようとしたのは、日本では高橋が最初であろう。

もちろん今日的視点からみれば、高橋の鋭い論調も資料の不足と時代の制約を免れ得ないのであるが、私は本書から実に大きい影響を受けた。

私は大学の学部時代には、『アメリカにおける植民地形成とヨーロッパ文

化の転移』をテーマとしていたので、植民地問題についてはそれなりの意見をもっていた。しかし、やはり私の見解は、先住民族を征服し支配した西洋列強の側からの視座、つまり、西洋を中心とした単線的な進歩史観の枠組から脱け出ていなかったことを改めて思い知らされた。

このように人生の峠にさしかかった地点で、「諸民族の文化の独自性と多様性」「それぞれの歴史発展の多系性」「植民地支配下の人権と差別」、そして「人間は何を目ざして、何のために生きるのか」という大きい四つの問題に改めてぶつかったのである。

それからすでに30年近くが経過しているが、それ以後、そのような主題について自分の考えを深めてきた。本稿もそのような到達点があって初めて書くことができたのである。ザビエルをはじめここに登場する人たちが、実際にそこで布教したインドや東南アジアの島嶼部を訪れることがなければ、私はこの原稿を書くことはなかったであろう。

人類史の大転換期に生きて、さまざまな苦難に耐えながら、「人間としてどう生きるか」「何を目ざして生きていくのか」というテーマについて考え、自らもその信じる道を実践していった数多くの先達の姿を思い浮かべながら、本書を書き進めていくことになる。

4 この歴史ドラマを構成するキー・ストーン

かなり大袈裟な出だしになってしまったが、まずこの歴史物語の主要な柱になるものを挙げておこう。ざっと挙げてみると、2部構成で次のような20項目になる。もちろん、この柱に沿って書き進めていけば資料だけでも膨大な頁数となるので、実際には要点を押さえながら歴史ドキュメントとして物語風に再構成していくことになる。

[第1部]

1 イスラム教世界とキリスト教世界の対立

- 2 15世紀における《大航海時代》の開幕
- 3 《宗教改革》と新・旧キリスト教国間の相剋
- 4 対抗改革運動の渦中で結成されたイエズス会の結成理念
- 5 ポルトガルのインド進出と植民都市・ゴア
- 6 インドの「カースト制・不可触民」とキリスト教
- 7 東洋へやってきたイエズス会の布教の精神と伝道の方法
- 8 西洋諸国の南太平洋・マルク諸島への進出
- 9 首狩り族として賤視されていた南太平洋諸島の先住民族
- 10 香料貿易と奴隷貿易の実態

[第2部]

- 1 ザビエルが編成した8人の訪日クルー
- 2 戦国時代末期の日本の社会情勢とキリスト教の布教
- 3 インドと西洋を訪れた最初の日本人
- 4 織豊政権時代におけるイエズス会の活動
- 5 天正遣欧少年使節団4人の最後
- 6 近世幕藩権力によるキリシタン弾圧
- 7 <島原の乱>と「宗門改」制度
- 8 隠れキリシタンと「キリシタン類族制」
- 9 近世後期における<崩れ>の実体
- 10 明治の開国とキリスト教解禁

とりあえず言えば、この20にのぼる柱がこの歴史物語を構成する重要な要石になっている。そして、この20のキー・ストーンに沿って物語は進行していくのだが、前半はインドと東南アジア、後半は日本列島が主要な舞台となる。

東洋と西洋を結ぶ点と点との接触は、それまでも皆無ではなかった。有史以前から、きわめて細い回路だったにせよ、両者を結ぶ交通路が開かれてい

たことはすでにさまざまな記録によって明らかにされている。

だが、次から次へと外洋帆船で運ばれてきた西洋文化の波が、東方世界の隅々までしだいに浸透していくようになったのは、15世紀末からの大航海時代に入ってからである。もちろん、キリスト教が東方世界に知られるようになったのは、これらの帆船に乗って宣教師たちが初めて未知の土地に上陸してからであった。

《大航海時代》から始まって、《東洋に布教したイエズス会》を基軸として《日本のキリシタン》に及ぶ——このような要石の配列を見れば、たいていの読者は、先に挙げた20にのぼる柱を結ぶ歴史的な流れの結節点に立ち、東西の人間交流に大きな一石を投じた小さな宗教結社が何であるか、もうお分かりだろう。もちろん、「イエズス会」に他ならない。そして、その会の東洋への初代布教長としてやってきたのがフランシスコ・ザビエルであった。

この物語の序幕の舞台となったのは、インド南西海岸のゴアである。そのゴアを起点として、東方への海路に沿って、この物語のステージは広がって行く。マレー半島のマラッカからインドネシア香料列島のアンボイナ（現アンボン）、さらに中国大陸南部海岸のマカオ・広東から寧波へと連なる航路が、太い線となって浮かび上がってくる。

この「海のシルクロード」と呼ばれた海路が、大航海時代以降の東西交流の大動脈となった。そこからさらに東方世界の東北端にあった日本への海路が開かれていくのだが、その航路は海のシルクロードから派生した一支脈にすぎなかった。

新しく開拓された航路に乗って、インドのゴアを東洋布教の拠点とした「イエズス会」の宗教運動は、東へ東へと教線を進めていった。1549年8月に日本の鹿児島に上陸してからは、平戸から山口へと教線を伸ばしていった。最も活発に布教が展開されたのは、当時のキリシタンが日本の「豊後・下地方」と呼んだ府内（大分）・長崎・島原・天草であった。そしてこの豊後・下地方を中心に、この物語の後半の壮絶なドラマが展開されていくのである。

ところで、このように並べ立てただけでは、先に挙げた20にのぼるキー・

ストーンを結びつけるそれぞれの連関はまだ十分に明らかではない。だが、物語の進行にしたがって、その結び目はしだいに解きほぐされていって、一筋の物語としての骨格が見えてくるだろう。

さまざまな人物が縦糸・横糸となって織り成すこの歴史物語は、新宗教を布教する苦闘のドラマであるにとどまらず、世界史上でも初めての本格的な東西の文化交流史であり、人間交流史であった。

それはまた国境という政治的な壁を突き破り、民族の違いや文化の差異を乗り越えて、「新しい人間の生き方」を求めて一つの運動体に結集して人びとの苦闘の物語であった。

そして、そこで織り成されたドラマは、西洋から渡来した小さな宗教団体に結集して同時代を生きた人びとの、精神と思想の＜高揚と燃焼＞＜葛藤と乖離＞の物語としても読むことができるのである。

5 日本に渡来した新宗教

日本におけるキリシタン布教史の深部に埋もれてしまった実相とは、一体どのようなものだったのか。それは物語の展開とともに、しだいにその真実のすがたを現わすことになるだろう。とりあえず言っておけば、今まで全く接したことがなかった碧眼紅毛の西洋人がもたらした新しい宗教運動に参加することによって、自分たちの＜人間として生きる意味＞を再発見しようとした多くの民衆がいたという事実である。

さて、中国人の操縦する小さな海賊船に乗って、新宗教の布教を目指す「イエズス会」の8人の一行が鹿児島にやってきた。彼らが上陸したのは、1549年8月15日だった。そのうちの3人は、鹿児島からマレー半島を経て、はるばるインドまで渡った日本人だった。そのリーダー格のアンジローの先導で、やっと南九州にたどり着いたのであった。

だが、十分な情報も得られないままに初めて未知の日本を訪れた西洋人にとっては、その前途に何が待ち構えているか全く予測できなかった。おそらく

く多大の不安と危惧を感じながら鹿児島に上陸したに違いない。

すでに何隻かのポルトガル船が九州にやってくるので、それなりの情報は得ていた。通商を目的とする交易船ならば、中央権力による統制力が全く失われていた当時の日本にあっては、たいていの場合はうまくいくことがマラッカで得た情報によって分かっていた。

しかし上陸した土地は、その教義や布教の実態がよく分からぬ仏教が支配している見知らぬ異国である。前触れもなく上陸して、果たして西洋人による異教の布教が許されるかどうか予断を許さなかった。たとえ布教が許されたとしても、仏教とは教義体系が根本的に異なる新宗教が日本人に受け入れられるかどうか、全く予測がつかなかった。

あとで詳しく述べるが、ローマ教会内部の革新的運動として始まったこの新しい宗教結社は、1534年8月、イグナテウス・デ・ロヨラ（1491～1556）とフランシスコ・ザビエルを中心にわずか7名の同志によって組織された。

時あたかも西洋世界全体を揺るがした《宗教改革》運動の全頂期であり、プロテスタント諸派のはげしい批判を受けて、ローマ・カトリック教会もかつてない思想的激震に襲われていた。そして、カトリックの側でもそれに対応するためにさまざまな改革がなされたが、その一連の動きが《対抗改革運動》であった。

彼ら7名は、正義と慈愛に充ちた父なる神の教え、人類の罪をあがなうために神が遣わした救い主イエス・キリストの遺命を体して、「地の果てまで」福音の証人として赴いて、その教えを伝えることを誓い合った。

そして、第一にこの世の＜富＞よりも＜清貧＞であることを選び、第二に俗界における＜名誉＞よりも＜侮蔑＞されることを甘受し、第三に＜傲慢＞ではなくて＜謙虚＞であること——この三つをモットーとしたのであった。

よく知られているように、イエスは進んで貧しい窮民の地を訪れ、罪人とされていた人びとと交わり、すべての人に「神の国」は開かれていると説いた。そして、当時法律で接触を禁止され、「棄民」として見捨てられていた身体障害者やハンセン病患者の所に出入りして、彼らの心身を癒すべく努

力した。

そのことは、新約聖書の冒頭に収められているイエスの生涯とその教訓を記録した福音書に詳しく語られている。その共観福音書を文献批判的に検討することによって、かなり信頼できるイエスの苦闘の生涯をたどることができる。イエスは、神のあわれみと愛は、この世の底辺や辺境の地で苦しんでいる貧しい人びとにこそ注がれると説いたのであった。

そのようなイエスの実践から学び、イエスがたどり着いた信仰の原点に立ち戻って、プロテスタントによってきびしくその腐敗と墮落を糾弾されていたローマ教会内の戦闘的な改革派として、「イエズス会」は十字の旗を高く掲げながら登場してきたのであった。

彼ら7人は、たまたまパリ大学で学窓を同じくした者が中心となった。そして大学における研究で、ローマ教会を批判するプロテスタント諸派の教説にも接していた。したがって、彼らにとっては、旧来のローマ教会の布教方針を無批判に踏襲することは初めから考えられなかった。

従来の修道会の伝道のやり方を革新し、修道服や歌唱祈禱などの古い形式の廃止をまず決定した。世俗の権力から見放されている人びとに、彼らと共に生きようとしたイエスの福音を伝えるべく、世界の辺境や僻地へと飛び立っていくことを誓い合ったのである。

そして、そのような見知らぬ土地で布教に従事する際には、貧民や孤児の救済、病人の治療などの福祉活動、学校を設けての無学者に対する教育など、社会活動に全力を挙げることを決めたのであった。いや正確に言うならば、布教活動と社会的な奉仕活動とが表裏一体となった新しい宣教方針を実践したのであった。イエズス会が未地の東洋の地で新しい信者を次々に得ていったのは、このような布教精神を根本においていたからであった。

6 少数民族のバスク人だったロヨラとザビエル

すでにみたように、この物語の第一幕の主役であるザビエルは、イベリア

半島の北東部にあるバスク地方に生まれた。彼と共にイエズス会を結成したロヨラもまた、同じバスク地方の生まれであった。

バスク地方は、イベリア半島の中でも、地誌的にも歴史的にも特異な風土として知られている。バスク地方は、半島の北部からピレネー山脈の南西部山麓まで広がっている。「バスク」という呼称は、紀元前1世紀頃にこの地を占拠したローマ人が、この地方の先住民族をウアスコニア（Vasconia）と呼んだところに由来している。

この地のバスク人は、旧石器時代からの先住民族と言い伝えられ、インド・ヨーロッパ語族に属さない固有の言語を持っていた。数千年にわたって、独自の民族文化のもとで生活してきたのであった。そして中世の時代から、狭いバスク地方の両側に住んでいるスペインとフランスの住民から、異民族として特別の目で見られてきたのであった。今日でも民族の自治権と、その独自文化の保持を目的とする抵抗運動が続けられていることはよく知られている。

現在の人口は約300万で、スペイン側に270万、フランス側に35万が住んでいる。スペイン側のバスク地方は、今日ではスペインでも有数の工業地帯であり、金融業・商業でも賑わっていて、バスク人は勤勉で実直な民族として知られている。

バスク人の祖先については諸説があるが、インド・ヨーロッパ語族の侵入以前の旧石器時代後期からこの地に住んでいた狩猟民族であって、ネアンデルタール人の末裔とも言われている。彼らが話しているバスク語の起源は不明であるが、ヨーロッパ最古の言語とされている。しかし、現在では、それを日常語とする人口はしだいに減ってきている。

古代ローマ帝国以来、絶え間ない外部勢力の侵攻によってその郷土を侵されてきたが、執拗な抵抗を続けながらバスク人のアイデンティティーを守り抜いて、独自の民族文化のもとで生活してきたのであった。

バスク人が中世に入って築いた国としては、ナバラ王国が有名である。そのナバラ王国の首都パンプローナは、紀元前74年にローマ人が建設した町で、

バスク地方では唯一のローマ的な都市だった。フランシスコ・ザビエルが生まれたのは、そのパンプローナから約50キロメートル離れたザビエル（バスク語ではハビエル）だった。今日では、観光客が訪れることもほとんどない小さな寒村だ。

ザビエルの荒涼とした丘の上に、彼が生まれ育ったザビエル城が復元されている。度重なる戦乱で昔の城は焼け落ちたが、あとでみるように彼の父はナバラ王国の大臣を勤めた家柄であった。

1936年にスペイン内乱が勃発すると、人民戦線派の共和軍を支持するバスク自治政府を樹立して、反フランコ政権の側に立った。ピカソの代表作『ゲルニカ』は、ナチスによるゲルニカ爆撃に抗議して描かれたものだが、ゲルニカはバスク地方の古い都の一つである。その議事堂の横にある檜の「ゲルニカの木」は、今日でもバスクの独立のシンボルとされている。

バスク地方の中心地であったナバラは、777年にフランクのカルル大帝が侵入してからはその属領とされていた。イベリア半島の中でも辺境の地だったのでローマ文化の浸透もあまり見られず、キリスト教化も遅れていた。ようやく9世紀末頃から独立して「ナバラ王国」が形成されると、しだいに新興のキリスト教国として注目されるようになった。そして、西ヨーロッパのキリスト教世界とイベリア半島を結ぶ交通の要衝となった。商業路でもあり、巡礼路でもあった大道が同国を通っていたために、西からの新しい文化がイベリア諸国に伝わる入口として重要な役割を占めていた。

ザビエルの類い稀な意志力と思慮深い指導力は、そのようなバスク人の苦闘の歴史の中で育まれてきたと言えよう。そして、ザビエルと共に「イエズス会」を結成して、ローマ教会内の新しい改新運動の火の手を挙げ、心霊修業という新しい方法を考案したイグナティウス・デ・ロヨラもまた、このバスク地方の生まれであった。

改めて言うまでもないことだが、激動の時代に織り成されたさまざまな人生模様を背景とする歴史ドラマは、一人の立役者だけで成り立つものではない。ドラマティックに繰り広げられる第1幕に引き続く第2幕以降は、その

筋立てもしだいに複雑になり、登場人物も多くなってくる。洋の東西にまたがって、この地球のさまざまな地方で生まれ育った人物が登場する。そのこと自体が世界史上でも初めてのことなのだが、舞台に出入りする人物も多彩になってくるので、ひとりの主役にしぼり切ることはいできない。

背景となる舞台も大きく、人と人との「出会い」も、そして「別れ」もまた、この上なく劇的であった。そして、結果として、今日に生きる私たちから見ても胸躍る大ドラマになったのである。もちろん、当の本人たちは、自分たちの活動が歴史にその名を留めることになるとは、夢にも思っていなかっただろう。

第2幕からその舞台は主としてインドとインドネシアに移り、さらに第3幕からは日本が主舞台となる。そして、この物語も＜島原の乱＞における3万8000人もの民衆の殉教に象徴されるように、悲愴な結末をむかえることになるのである。それゆえに舞台の奥行きも深く、いつまでも心の底にその余韻が残る劇的なドラマになったのである。

7 イエズス会の際立った結成理念

ここで付言しておかねばならないのは、イエズス会の伝道理念の確立に際して、イグナテウス・ロヨラの説いた「霊操」(exercicios espirituales)の方法が新しい布教方針として取り入れられたことである。

霊操とは、文字通りに言えば一種の精神鍛練である。「観想」による日常性を超越した内的直観によって、神の意志を学び取り、イエス・キリストの生きてきた道をイメージすることを目的としたのであった。

具体的に言えば、「霊操」は4週間にわたって体系的に実施される。第1週では罪の認知と心の浄化、第2週はキリストの言葉によってその行動の軌跡を学ぶ、第3週はゴルゴダの丘で十字架刑に処せられるまでのキリストの受難、第4週は苦しんでいる人間たちの救い主として再びよみがえるキリストの復活——このような段階を経ながら、神と深く交わり、人類救済のため

に働いたキリストの姿を実際に心に思い浮かべ、それにならって自分の生きていく道を観想の中で探るのである。

もちろん、カトリック教会内でのフランシスコ会、ドミニコ会などの修道会では、神との神秘的合一を目ざすために黙想・祈り・観想などの方法がすでに取り入れられていた。誤解を恐れずに現代的に言えば、神と交わるための神秘的なイメージ・トレーニングによる新しいマインド・コントロールの手法の一つであった。

しかし、ロヨラの説く霊操が、旧来の観想と大きく異なる点があった。つまり、神に祈り神を賛美し、一種の靈感の中で神の愛に浸るという静的な観想にとどまるのではなくて、4週にわたってキリストの生涯を辿りながら、「神と人類への奉仕」という実践的な課題を学ぶことを究極の目的としたのであった。

すなわち、よく知られているようにキリストは、この世の底辺で悩み苦しんでいる人びとの癒しと救いのために働いて、ついにゴルゴダの丘で十字架の刑に処せられた。そのキリストの死と復活を観想の中で追体験しながら、自らの生きざまを反省し、自分の使命を自覚し、その意志力と行動力を高めていくのである。そして最後の週では、復活したキリストが人びとの救いのために自分と共に歩んでいる姿を実想するのである。

つまり、徹底的に世俗的な自我を滅却しながら、それによって自分の生涯を神に捧げて、神の慈愛に生きる真の自己を発見していくのである。初期のイエズス会士が実践した「求道の旅」、すなわち、はるかなる異郷で神の愛を教え広めるための苦難の旅は、キリストと共に歩みながらの「自分さがし」の旅であり、真の自己を見出すための修行であった。

あとで詳しくみることになるが、ロヨラはバスク地方のアスペチアにあるロヨラ城で貴族の家に生まれた。1521年のフランス軍のナバラ王国の首都パンプローナ攻撃の際には、僅かの兵士を率いて祖国防衛のために闘ったが、ロヨラ自身は重傷を負い、城はついに陥落した。

片足が不自由となったロヨラは重い障害を負いながら生きていくことにな

るのだが、それがなければ、もちろん彼も海外への布教に出かけていたであろう。そして手術を受けて病の床にあった最中にキリストに関する本を読んで、それまでの自堕落な貴族生活を自省して、大きく回心することを決意したのであった。それからは、神に奉仕する巡礼者の黒い服をまとして勉学と修養にいそしんだ。しかし、あとでみるように、スペインの大学で勉強している時には、異端として宗教裁判所に訴えられて監獄に入れられた。

もう一つ付言しておかねばならないのは、東洋からやってきたザビエルたちは下層の民衆を中心に布教を進めたのだが、インドにおいても特に漁夫たちの貧しい村に積極的に入ったことは注目される。それには、バスク地方に根強くあったヤコブ信仰が作用していたと思われるのである。

12使徒の中でも早くからイエスに従った弟子であったヤコブとヨハネの兄弟は、ガリラヤの漁夫であった。ヤコブはキリスト教を容認しなかったユダヤ王ヘロデ・アグリッパの迫害によってパレスティナで殉教したが、遠くイベリア半島まで伝道し、数々の奇蹟を起こしたという話がながらく語り伝えられていた。

9世紀初頭に、スペイン西北部のサンチャゴ・デ・コンポステラでヤコブの遺骨が発見されたというニュースは、たちまち西ヨーロッパのキリスト教世界に広がった。そして、ヤコブは、イスラム教徒と闘うキリスト教徒の守護神とされたので、十字軍全盛時代にはその地を訪れる巡礼が西欧各地から絶えなかった。すでに述べたように、その巡礼路はバスク地方のナバラ王国を通っていた。ナバラ王国の東端にあるザビエル村で生まれ育った若き日のフランシスコ・ザビエルの心にも、この漁師ヤコブの像が強く刻み込まれていたであろう。

彼らの行動綱領からすれば、民族や国家の壁、あるいは<貴・賤>という身分や職業の違いを越えて、そのイエズス会はいかなる出自の人びとにも開かれていなければならなかった。事実、この7人の中にはスペイン生まれのユダヤ系の新教徒であったデイエゴ・ライネス（1512～65）も参加していた。そして彼がロヨラの後を継いで第2代の総長に就任するのだが、そのあたり

の事情については後述する。

彼らはその生涯を懸けてその誓約を実行しながら、遠い異境の地でしだいにその同志を増やしていった。この日本にもあいついで宣教師が渡来したが、そのほとんどは再び故郷の土を踏むことなく異国の地で客死した。最後までその信仰と志を曲げることなく、世界でもあまり類を見ない徹底的な宗教弾圧に屈せずに殉教した者も少なくなかった。

8 戦国時代末期の日本の社会状況

ザビエルの一行が上陸した頃は、戦国時代の末期であった。戦国大名が各地に割拠して、室町幕府の権力は完全に無力化していた。応仁の乱以来のほぼ1世紀にわたる内乱によって国土は荒廃し、多くの民衆が戦乱の犠牲となった。その日の糧に苦しむ貧民・窮民が絶えなかった。「天変地異」もしきりに起こり、水害・旱魃・疫病・地震なども相次いだ。

しかし、他面では「下剋上」の風潮が広がり、《一向一揆》に代表されるように民衆の反権力闘争が高揚し、都市や村々の自治的基盤が固まっていく時代であった。戦国大名の経済的・軍事的必要もあって、領国支配体制を確立するために流通・交通条件の整備が進められ、農耕生産力や商品生産も発展しつつあった。やがて室町幕府の支配体制が崩壊して、新興勢力としての織田・豊臣政権が出現し、中世から近世へと転換していく大いなる過渡期であった。

中世にあっては、＜生＞と＜死＞をはじめとして、人生の意味を価値づけ、時代の流れを大観しながら来世のあり方を啓示する大思想は、すべて仏教界の占有するところであった。だが、天台宗・真言宗を中心としたいわゆる「鎮護国家仏教」が主流であった仏教界は、長年にわたって朝廷・幕府権力と癒着して、時代をリードするような新しい動きを全く見せていなかった。大寺院では貴族化と門閥化が進んでいた。壮大な堂塔を建て、諸国にいくつもの荘園を所有し、僧兵を養って一大武装集団を丸抱えしていたのである。

苦しみ悩んでいる民衆を救済するどころか、その抑圧と搾取によって大僧院を維持してきたのであった。

そういう僧院体制の内部から、新時代の到来を予測する新しい思想や、民衆の動向を左右するような新しい宗教運動が澎湃として起こってくることはありえなかったのである。

だが、鎌倉時代に入って、まず天台宗の内部から、新しい動きが起こってきたのである。権門勢家に独占されていた仏の道を改めて民衆の側から問い直し、権力による宗教統制を解き放とうとした新しい運動が起こってきたのである。

それが鎌倉期に興隆した新仏教の各派だった。貴・賤を問わず人間の〈生〉と〈死〉をまともに見据えて、衆生ひとりひとりに対する仏の救いを、日本宗教史上で初めて問題としたのであった。そして、民衆の生きざまの中に、誰もが実践できる仏の道を持ち込んだ。法然の「専修念仏」、親鸞の「信心正因」、一遍の「念仏踊」、日蓮の「唱題目」、道元の「只管打坐」を挙げることができる。——これらの修業は、難解な仏典を読むこともできず、全く身に教養をつけていない凡夫・悪人でも行うことのできる「易行易修」として、燎原の火のように民衆社会に広まっていった。

そして、これら新興諸派の中でも、法然と親鸞の説いた専修念仏による「一切衆生・平等往生」の思想は、国家権力によって徹底的に弾圧された。旧仏教の側からすれば、その新仏教は観想・持戒の善行を廃し、敬神・鎮護国家を排し、破戒女犯を認め、罪惡深重の凡夫・悪人の救済を力説する邪教に他ならなかった。

朝廷や大寺院からの徹底的な迫害を受けて、日本の《宗教改革》とも呼べるその新しい民衆仏教は、一時は閉塞していった。しかし、15世紀に入ると、《一向一揆》として再び息を吹き返してきた。

このように法然・親鸞に始まる新しい浄土教の理念に導かれて一向一揆に結集した新興宗教勢力を除いては、既成の仏教は、相次ぐ戦乱に苦しみながら生きていく道を求めていた民衆には全く縁のない存在であった。

そのような社会的状況の中へ、突然西洋からの新宗教が上陸してきたのだ。そして、数年を経ずしてその運動は西日本を中心に急速に広がっていったのである。

この日本列島で、どれほどの入信者があったのか。正確な統計資料は何も残されていない時代であるから、キリシタン信者の実数は定かではない。1549年のフランシスコ・ザビエルの渡来から、幕府の禁教と迫害によって宣教師がすべて捕らえられて処刑された1640（寛永17）年まで、およそ90年間にわたる布教期間で、総数で数十万人から100万人に近い入信者があったと推定されている。宣教師たちのローマ教会への報告書でも、入信者の総数は一致していないので確かなことは分らないが、1610（慶長15）年にイエズス会の指導下にあった信徒が22万という報告が一つの手がかりとなる。

最盛期には40万人以上と推定されているが、現代日本のキリスト教徒の総数が約105万人であるから、戦国時代末期の人口が2000万に充たなかったことを考えると、この数十万は驚くべき数字である。しかし、世界史上でもあまり類例を見ない国家権力による徹底的な宗教弾圧によって、地下に潜伏したごく一部を除いて、地上から完全にその姿を消してしまうのである。

9 世界史でも稀な宗教弾圧

もちろん、文字を学んで物の本を読む機会に恵まれた上層の支配階級からの入信者もいた。だが、信徒の大半は、学問とは無縁で読み書きもできぬ貧しい民衆であった。彼等の多くはその日暮らして、「不殺生戒」をはじめとした仏教の戒律を守ってはいなかった。そんな戒律を守っていたら、到底生きていけなかった。

当時の大寺院の得度僧たちは、民衆の間に入って仏の道を説くことはなかった。特に数多い下層の民衆は、「十悪五逆」を犯した「罪惡深重の凡夫・悪人」「下根劣弱の衆生」とみなされていた。彼らに、仏の慈悲が及ぶことはありえず、仏法の外にある棄民とみなされていたのであった。

そのような「棄民」を相手としながら、見捨てられていた底辺の社会にあって、当時の庶民信仰を担っていたのは、乞食をしながら諸国を歩いていた下級の聖たちであった。得度もせずモグリの僧形をした聖たちであったが、彼らは貧しい在所を遊行しながら民衆に生きる道を説いていたのであった。そして、この底辺の社会から、クリシタンになった者が多かったのである。

そのことは、布教の最前線で活動して、3000人にのぼる信者を得たと伝えられているのが、目の不自由な琵琶法師・ロレンソ了西だったという事実に象徴されている。その当時の障害を負った遊芸民が「道々の者」と呼ばれて、社会的にどのように処遇されていたか、改めて言うまでもない。

ひとかどの教養がある現代の日本人でも、『聖書』を通読し、教理問答書（カテキズム）に目を通してキリスト教の教義を理解することはそう簡単ではない。にもかかわらず、文字も満足に読めず高尚な宗教談義とは全く無縁であった下層の民衆が、言葉も考え方も十分に通じない異国からもたらされた新宗教運動に、なぜ敢然として参加していったのだろうか。

一体、彼らは本当に宣教師の説いた「神の国」について理解することができたのであろうか。「救い主」イエス・キリストについて、どのような実像を結ぶことができたのだろうか。熱心にその教えを説きながら、献身的に活動する宣教師の姿を見て、何を感じたのだろうか。

このことは日本だけの問題ではない。インドや東南アジアを含めて、東方世界でも多くの民衆が信徒となった。何が彼らを駆り立てて、全く未知の異教の神、イエス・キリストの信徒たらしめたのであろうか。

あとで詳しく見るように、豊臣秀吉は1587（天正15）年に、いわゆる「バテレン追放令」を出した。その後を継いだ徳川家康は、対外交易を円滑に進めるためにクリシタンの布教を黙認していたが、1612（慶長17）年に幕府直轄領におけるクリシタン布教を禁じた。さらに1614年には全国にクリシタン禁教令を発して、在日宣教師の国外追放を命じた。

幕府は寛永年間に入ると、キリストや聖母マリアの像を足で踏ませる「踏絵」によってクリシタンの探索を強化し、さらに宗旨人別帳による「宗門改」

を制度化した。家ごとだけではなく、個人別に戸籍台帳を作成して、すべての人民が仏教寺院の檀家になることを義務づけたのであった。

そして、1635（寛永12）年には、いわゆる「鎖国令」を出して日本人の海外渡航を禁じ、西洋人との混血児の海外追放、長崎出島の建設による西洋人の隔離策を実行した。そして、ローマ・カトリック系のポルトガル、スペインとの交易を禁じて、プロテスタント系のオランダとの通商に窓口を一本化したのであった。

そして、1637（寛永14）年に勃発した《島原の乱》後は、ほぼ完全にキリシタンの活動は終焉した。それからは「キリシタン類族制」を実施して、転びキリシタンでも信仰に立ち返る者が出ないように、その子子孫孫に至るまで出産・結婚・死を克明に記録して「類族帳」に登録させた。そのような国家権力による水も漏らさぬ個人ごとの「宗門台帳」の作成と、棄教せぬ者を死罪とする徹底的な迫害は、世界の宗教弾圧の歴史でも例を見ないものであった。

民衆の多くは弾圧によって棄教した。だが、転向すれば生命が助かることは分かっていたが、最後まで仏教への転宗を拒否して、ついに殉教していった民衆もかなりの数にのぼったのである。

彼らは何を願い、何を志して、一種の運命共同体とでもいうべきこの新しい宗教結社に加盟していったのか。それまで全く未知であった西洋人のもたらした新しい思想・文化運動に、何を期待して参加していったのだろうか。—そのような問題を産みだした社会的基盤とその思想史的な意味を追求していきながら、その実相を解明していくことになる。

しかし、空間的にも時間的にも縦糸・横糸が複雑に交錯して、そこで織り成される人生模様をベースに話は展開していくので、歴史の闇に消えていった「人の世の真実」について物語ることは一筋縄ではいかないのだ。

（未完）

(付記)

この草稿は、現在構想している「東西文化交流史におけるF. ザビエル」の序章の部分です。全体で600枚ほどのかなり長大な論稿になりますが、とりあえず出来上った序章をこの記念号に寄稿させていただきました。

藤間先生と私とは、小学校以来同じ学年でしたので、全く同時代を生きてきたことになります。若かりし頃の友人の何人かは、すでにこの世を去っております。その中には、あのいまわしい戦争の犠牲者も数多く含まれております。

戦後の苦難の時代を切り抜けて、なんとかここまで生きてきましたが、まだ「見るべきほどのものは見つ」という達観した心境にはなっておりません。

21世紀以後の人類史がどうなるか、まだまだ気掛かりなことが多いのです。お互いにこれからも元気に頑張って、「生き残った同時代人」としての責務を果たしたいと考えています。

36年にわたるこの大学での学窓生活において、先生に教えられ助けていただいたことも多々ありました。心からご友情に感謝します。